

恋のドライブは王様と

目次

恋のドライブは王様と

5

総帥そうすいの退屈たいくつな日常

187

恋のドライブは王様と

都心の、大きなビルが立ち並ぶ一角。その裏路地に、わたし、富樫一花とがしいちかが働いている小さな可愛いカフェがある。店の名前は「ブランシュ」。フランス語で白という意味のその店は、オリジナルブレンドの珈琲コーヒーと、マスターお手製のパンケーキや軽食軽食が美味おいしいいと評判だ。

内装はカントリー調で、艶つやのある木目のカウンターとテーブル席が四つ。少し古ぼけた感じのコットンやレースがところどころに飾ってあって、物語の中に出てきそうなくらい可愛い。もちろん、このわたしが毎日隅々まで掃除をしているから、店内はいつもピカピカだ。

「一花、手が止まってる。窓ガラスの曇り、ちゃんと拭ふいて」

「は、はい」

店の奥から小さいけれど鋭い声が飛んできた。この店のマスターで、わたしの遠縁でもある水上みなかみ祥吾しょうごくん。わたしは慌てて窓のかすかな曇りをキュキュツと拭く。

キレイになった窓ガラスには、化粧つ気のないわたしの顔が映っていた。キレイか可愛いかの二択でいうと、可愛い分類のほうだろう。一応、目は大きいと言われているし、そのせいか若くも見られるし……。二十五歳という年齢のわりには、幼い顔をしているという自覚はある。

肩よりも長い髪は仕事中はひとつ結びにして、後ろにまとめている。服装も、動きやすいという理由から、シャツかチュニックにジーンズだ。それがさらに幼く見せているんじゃないかとも思う。今時の化粧いまときをして、髪形も洋服も年相応のおしゃれをすれば、わたしだって結構イケると思うのだけれど。祥吾くんから、接客業だから華美にならないよう言われているのだ。

祥吾くんは、そこら辺で安く売っている白いシャツに黒いズボン姿。そして男性にしては少し長めの髪を、軽く後ろに流している。それだけなのに、元々かなりの美形なので、どこから見てもイケている。神様は不公平だ。

「一花、また手が止まってる」

祥吾くんの厳しい声で現実に戻されてしまった。せっかくイケメンなのに、根性が捻ねじ曲がつているのか、祥吾くんは結構厳しい。おまけに客といえど気に入らない人には容赦がないので、祥吾くん目当てでカフェにくるキャピキャピした若い女の子なんかはことごとく追い払われている。

なので、可愛いお店のわりに若い女性客はほぼこない。そんなお店でわたしはかれこれもう七年近く働いている。自分で言うのもなんだけど、祥吾くんのお小言にも耐えられる、我慢強い性格なのだ。

開店時間になったので、入口の鍵を開けて表のドアノブに「OPEN」と書かれたプレートを掛けた。扉を閉めて中に入った途端に、扉につけてあるベルがカランと鳴った。振り返らなくてもわかる。毎日十時の開店と同時に入ってくる人は一人しかいない。

「一花ちゃん、冷たい水ちょうだい」

カウンターの真ん中にどっかりと座るなり突つ伏したのは、ヨレヨレのスーツ姿の、どこことなく怪しい男。この店の常連客で、橘六郎さんと言う。年齢は四十代半ば、職業は探偵だ。毎日十時ここにきて、ほぼ一日中居るときもある。本当に探偵なのか怪しいところだけれど、本人曰く優秀らしい。

「はい、六ちゃん。……また二日酔い？」

かすかなアルコールの匂いを感じながら、目の前に水の入ったグラスを置く。すると、彼は素早くそれを手に取って一気に飲み干した。

「俺にもつきあいつてものがあるんだよ、一花ちゃん」

「ふーん」

探偵にいったいどんなつきあいがあるんだか。また突つ伏した六ちゃんを呆れた目で見やつてから、厨房でランチの下ごしらえを始めた祥吾くんを手伝う。

祥吾くんは元々料理が上手かったけど、カフェを始めてその腕はさらに上がっている。盛り付けも可愛く凝っている。でも如何せん若い女性客がこないで、あまり評価はされていない。すぐくもつたいたい……と言うわたしに対して、祥吾くんは「別にかまわない」と気にする様子もない。

そして、もう少しでランチタイムという頃、六ちゃんがようやく顔を上げた。

「マスター、珈琲」

「はいはい」

呆れ顔の祥吾くんが慣れた手つきで特製の珈琲を淹れた。香ばしい香りが店の中に広がっていく。

珈琲を飲んで、六ちゃんが満足そうに頷いたそのとき、また入り口のベルが鳴った。
「おはよう、みなさん」
やけに艶っぽい声で挨拶をし、六ちゃんの隣に優雅に腰掛けたのは、長い髪を無造作に束ねただけのキレイな女性。この店の常連客の一人、風間小春さんだ。

白いゆつたりとしたシャツにジーンズというわたしと同じような格好なのに、色気が全然違う。職業は高級クラブのママ。本当の年齢を聞くと怒られるので正確には知らないけど、たぶん三代後半くらいだろう。二十代で自分の店を出したというツワモノで、こう見えて男らしい女の人のだ。

「マスター、ハーブティーもらえる？」

起き抜けのその顔はすっぴんなのに、その辺りの化粧の上手な女の子よりもキレイだ。

祥吾くんは小春ママお気に入りのローズヒップの茶葉をガラスのティーポットに入れ、沸騰したお湯を注ぐ。あつという間にキレイな赤に染まったそれを、お揃いのティーカップと一緒に、彼女の前に置いた。

ランチの時間に入ると、店も多少は忙しくなってきた。祥吾くん目当ての女の子達ではなく、普通のサラリーマンや落ち着いた感じの女性が多い。

六ちゃんと小春ママも並んでランチを食べている。この調子だと、六ちゃんは今日も一日中ここに居ることだろう。小春ママは、いつものように出勤までここでのんびり過ごす予定のようだ。

午後一時を過ぎた頃、もう一人の常連客がやってきた。

「一花ちゃん、いつものね」

そう言って小春ママの隣に座った男の人は、中山尚なみやまさん。メガネにパリッとしたスーツ姿で、見るからにエリートって感じた。彼は祥吾くんと同級生で、この近くの弁護士事務所なやまで弁護士をしている。ランチの時間と、時々閉店間際にコーヒーを飲みにくるのだ。

我が「プランシユ」の常連客は、この三人。仕事も個性もバラバラなのに、ここが出来た当初からみんな仲良しだ。

「一花、ぼやっとしてないでサツサと運んで」

「ハイハイ」

「ハイは一回」

祥吾くんの静かな叱責を受けて、トレイ片手に店内を慌ただしくまわる。

わたしの毎日はこの風になんか忙しくて過ぎていく。充実していると言えはしている。あの日「決心した通り、今を精一杯生きているからだ。後悔しないことは難しいけれど、それでも前だけを向いていくと決めたんだから。」

これであとは素敵な恋人でも居れば言うことなしなんだけど……。悲しいかな、現在彼氏と呼べる存在は居ない。別にずっと居なかつたわけじゃない。学生の頃はそれなりにモテたんだから。でも、なぜか長続きはしない。わたしが悪いのか、相手が悪いのかそれはわからないけど。

カフェで働いていても出会いなんてほとんどない。わたし目当てで通ってくれた人も過去には居たけれど、祥吾くんや小春ママ達にいじられて、いつの間にかこなくなってしまった。

まったく、人の恋路を邪魔するなんて。……腹は立つけど、彼らに立ち向かえるほどの根性はないのだ。

あー、この枯れた生活くわに潤うるいがほしいわ。

「一花、黄昏たふがれるならもつと後にして」

「……はー」

うう、祥吾くんの意地悪。ちよつとくらい、いいじゃない。

心の中でぶつぶつ言いつつ、それでも素直に仕事を続けた。

2

朝、目を覚まして部屋のカーテンを開けると、五月の青空が見えた。あのとときと同じくらい、透き通るような青い空だ。

今も決して忘れない、五月の澄み切った青空に、高い煙突えんとつから立ち上る白い煙が溶けて消えていく風景。それから、ぼんやりとそれを見上げて泣いている自分。

わたしの両親は、二人で車に乗って買い物に行く途中、飲酒運転のトラックに追突され、そして亡くなった。

本当に仲の良い二人だった。きっと天国で、わたし達連が悪かったわね、こんなことも一緒だな

んてね、とか言って苦笑いしていることだろう。

『ねえちゃん……』

涙声と、繋いでいる指先の震えが一緒に伝わってくる。いつもはやんちゃ過ぎるほど騒がしい弟が、これまで見せたことのない絶望をその顔に浮かべていたことも、決して忘れない。

『大丈夫よ、大地』

握っていた手にぎゅつと力を入れる。

“なんとかなるわ”

それは、亡くなった母の口癖だった。駆け落ち同然で結婚して、親類達から縁を切られ、それでも底抜けに明るくて、いつでも前向きだった両親。

残されたのは十六歳の自分と七歳の弟、たった二人。それでも……

『なんとかなるわ』

口に出して言ってみたら、本当にそんな気持ちになってくる。思いつきり泣いて、とことん悲しんだら、それからはずっと前を向こう。

生きている以上、死は平等に訪れる。そのタイミングがいつになるのか、それは誰にもわからない。それなら、*“今”*を全力で生きなければ。決して後悔しないように。

そう、決意したのだ。

とはいえ、大地と二人、火葬場で途方に暮れていたのは事実。そのとき――

『何にも心配いらないよ』

駆け込んでくるなりそう言っ、わたし達の頭を撫でてくれたのが、祥吾くんの両親だった。祥吾くんのお父さんは、父の従兄にあたるという。そして、家族から絶縁されていたわたし達の両親と、ただ一人密かに連絡をとり続けていた人だった。新聞で事故のことを知り、急いで駆けつけてくれたそうだ。

『何かあったら、子供達を助ける約束をしていたんだよ』

呆然としていたわたし達に、水上のお父さんがそう言った。

事実、あとで両親の遺品を整理していたら、そのことを綴った遺言書のような手紙が出てきた。

その後、わたしと大地はすぐに水上の家に引き取られることになった。弁護士をしている祥吾くんのお父さんが、事故後の手続き、裁判、そして相続まですべてを引き受けてくれた。学校は転校しなければいけなかったけれど、その手続きまでやってくれたのだ。

『ご両親の貯金と保険金は、二人の名義で定期預金に入れたからね。進学や必要になったときに使いなさ〜』

真新しい通帳と印鑑を、わたし達に確認させてから家の金庫に入れ、そのお金とは別に、普段自由に使えるおごづかいも用意してくれた。おかげで、わたしも弟も何不自由なく過ごせ、問題なく進学することが出来たのだ。

祥吾くんのお母さんもすごく優しい人で、両親の事故以来一人で眠れなくなってしまった大地に毎晩添い寝してくれた。

『男の子だからって、我慢することはないのよ』

すっかり小さな子どもみたいになってしまった大地を、いつでもぎゅっと抱きしめてくれた。当時まだ一緒に住んでいた祥吾くんは大学院生で、わたしや大地の勉強を見てくれ、時々急に悲しくなって泣き出してしまいうわたしを優しく慰めてくれたりもした。

水上の家は絵に描いたような優しい家だった。優しくて頼もしい養父母と秀才の祥吾くん。両親を失いはしたものの、その後の自分達はどれだけ恵まれていたのか。それを実感し、悲しみも徐々に薄れてきたある日のこと。平和な一家に衝撃が走った。

ずっと弁護士を目指して勉強をしていた祥吾くんが、突然学校を辞めてカフェを始めると宣言したのだ。

『何を言っても無駄だよ。もう決めたから』

反対するお父さん達をよそに、祥吾くんはさつさと準備をしてあつという間に開業した。そして、同時にそのお店の二階に引っ越してしまった。

ただ、他の従業員を雇う余裕はなくて、当時大学生だったわたしが土日を含め、時間のあるときに手伝いに駆り出された。しかも無給で！

その後、就職氷河期で就職が決まらなかったわたしは、結局そのままカフェで社員として働くことになる。

『一花ちゃんを雇うなら、ちゃんと給料を払って正社員にしなさい』

と祥吾くんのお父さんが言ってくれたおかげで、今は一人暮らしが出来る程度のお給料を頂いている。

一人暮らしを始めたのは、ちゃんとした給料をもらい始めて半年が経った頃。通勤時間の短縮と、いわゆる一人暮らしへの憧れというヤツから決めたことだ。

大地にはブーブー言われた。水上のお母さんも寂しくなるわと言っていたけれど、部屋探しや新しい家具や家電を買いに行くときはみんながつきあってくれた。

今でも月に一度は必ず家に帰るし、時間が合えば一緒に食事にもいく。あの家族と過ごす時間は何より楽しい。

亡くなった両親を忘れてしまったわけじゃない。でも、寂しくは思っても悲しい気持ちはあまりない。きつと両親もこうなることを望んでいると思う。そのために、わたし達をあの家族に託してくれたのだから――

「あつ、もうこんな時間だ」

急いでお化粧をして、鞆を持って部屋を飛び出した。

最寄り駅まではそれほど遠くない。今朝も駅に駆け込み、すぐにきた電車に乗り込んだ。乗車時間は約四十分。朝の通勤時間とは少しずれているとはいえ、電車はいつも満員に近い。でも、毎日毎日ぎゅーぎゅー押される日々ももうすぐ終わるのだ。そう思ったら、嬉しくなってきた。

「グフフ」

つい声が出てしまう。目の前に座っていたおばさんが奇妙な目を向けてきたのがわかった。いけない、顔を戻さなきゃ。そうは思っても、嬉しさが込み上げてくるのは止められない。

突然ですが、なんとわたし、自動車デビューをしちゃうのだ。運転免許は身分証代わりに二十歳

の頃に取ったのだけど、それつきり車には乗っていなかった。

でもこの前、偶然前を通った中古自動車屋さんで運命の出会いをってしまった。それは可愛いピンク色の軽自動車。ヘッドライトが大きな目のように見えて、まさに動物みたいな可愛らしさだった。世間ではそれを一目惚れと思うのだと思う。

『ぎゃあーっ!! なにこの壮絶に可愛い車は!?!』

叫び声とともにお店に駆け込んだ。

『あ、あの可愛い子をぜひわたしにっ』

今思えば、自分でも引くくらいおかしいテンションで、困惑している店員さんを車の前まで連れていき、とりあえず仮押さえした。それから水上のお父さんをお願いして保証人になってもらい、ローンを組んだ。アパートの駐車場を契約して、カフェの駐車場も使えるように祥吾くんに頼んである。

“あの子”を迎える準備はすっかり整っている。あとは納車を待つばかりなのだけど、保険の手続きとか色々あるらしく、もう少し時間が掛かるようだ。

ああ、憧れの自動車通勤! 都心を走るの少し怖いけど、すぐに慣れるだろう。今のうちに、お気に入りの音楽CDを作っておかなくちゃ。やっぱりドライブには音楽が付きものだもんね。

「一花ちゃん、いつにもまして頭の中に本物のお花が咲いているみたいなの顔してるわね」

ランチタイムの忙しさを乗り切り、“あの子”のことを思い出しながら鼻歌交じりに洗い物をし

ていたら、目の前でまったくくろいでいた小春ママに言われた。

「いつもあんな顔でしょう」

その隣に座っていた中山サンがさりと告げる。ちなみに六ちゃんはいつものようにカウンターに突っ伏して寝ている。

どんな顔だと一瞬ムツとしたところで、祥吾くんが隣に立ってお皿を拭き始めた。

「どうせ、車のことも考えているんだろ」

「すごい! 祥吾くん、どうしてわかったの!?!」

驚いて振り向くと、祥吾くんが呆れたように肩をすくめた。

「なになに? 一花ちゃん、車買ったの?」

「うん。ローンだけだね。でも納車はまだなの。中古の軽なんだけど、すごく可愛いの!」

超ご機嫌に話していたら、中山サンが真顔で言った。

「事故つたらずぐ連絡しなさい。弁護士をあげるから」

「弁護士が必要な事故ってどんなのよっ」

「人身とか?」

中山サンの言葉に、一瞬だけ過去の記憶が蘇る。大破した両親の車と飛び散ったガラスの破片。現場ではなく、裁判のときに見せられた写真でだけど、今でもまだ目の奥に焼き付いて消えない。

「中山」

祥吾くんの声が静かに響く。それと同時に小春ママが中山サンの頭を叩いた。

「ああ……すまなかった、一花ちゃん」

申し訳なきような顔をした中山サンに、ふるふると首を振った。

「ううん、いいの、気にしないで。もう大丈夫だから。そのことについては、免許を取るときも、今回車を買おうと決めたときも、みんなでしっかり話し合ったから。車が凶器になることもちゃんとわかっている。気をつけるから」

微笑んでみせると中山サンがホッとした顔になる。

ちよどそのとき、店の入り口のベルが鳴った。

「いらつしやいませ」

声と同時に顔を向けた瞬間、わたしの世界は時間を止めた。

入ってきたのは背の高い男の人だった。わたしでも仕立てがいいとわかるくらいの、パリッとした黒っぽいスーツを着ている。鋭い目つきをしても、その美しさはまったく損なわれていない。世の中にこんなキレイな男の人が居たのか——ハンサムなんて言葉では言い表せないくらい素敵な人だった。

切れ長の目は、くつきりとした二重。鼻筋はすつと通っていて、唇の形もキレイだ。黒い髪は後ろに流れるようにセットされていた。祥吾くんもかなりのイケメンだけど、彼はそれ以上だ。

わたしが見惚れている間に、その人はつかつかとカウンターに近寄ってきた。途端にわたしの心臓があり得ないほど速く動く。

わたしの呆然とした顔を見て怪訝けげんに思ったらしく、小春ママや中山サン達が振り返り、彼を見た。

ああこれって……はじめてあの可愛い車を見たときと似ている。あのときと同じように叫び出したい。

ギャーツツツ、この壮絶なまでに素敵な人はどこの誰なの!?! あまりに素敵すぎて瞬まばたきすら出来ない。目を閉じるのがもつたいたい。ずっと見ていたい! というか、見るしかないっ。

からだ中の血液が全部頭に上りそうな錯覚さくかくに陥おぼつた瞬間、ランチを食べてからずーっとカウンターで寝ていた六ちゃんがむくりと起き上がって、椅子をぐるりと回した。

「時間ぴったりだ」

「あなたが橘さん？」

酒焼けと寝起きのせいで声がガラガラな六ちゃんに、超絶にキレイな人が低い声で言った。ああ、声までも素敵。

「まあな。マスター、奥借りるよ」

六ちゃんはそう言うと、彼を奥のテーブル席うながに促した。

「一花、見惚れてないで注文とってきて」

「は、はい」

チャンス!! あのキレイな人を間近で見られる大チャンスだわっ。

トレイにお水とおしぼり載せて、大急ぎで奥のテーブル席に向かいながら、さりげなく自分の髪を直す。飲食業だからと、髪はひとつにまとめているし、前髪もピンで留めてる。あまり乱れようがないのだけど、念には念を、だ。

テーブルを挟んで向かい合って座り、なにやら神妙な雰囲気をもしだしている二人に近寄った。「いらつしやいませ。ご注文は何にしますか？」

いつもより少し高い声が出てしまったけど、仕方がない。だって、近くで見た彼はやっぱりとてもなく格好いい！

水の入ったグラスとおしぼりを置いたところで、

「ブレンド二つね」

と、六ちゃんが答えた。ハンサムさんの方を見たけれど、異存はないらしい。チェッ。ちよつとだけでもお話ししたかったのに。

「かしこまりました」

いつもは六ちゃんにはしないお辞儀をして、カウンターまで下がる。

「祥吾くん、ブレンド二つ」

「はいよ」

カウンターの前に戻りカップの準備をすると、隣からすぐに珈琲の香ばしい匂いがしてきた。

「すごい美形ね」

それまで黙っていた小春ママが、奥のテーブルを見てポツリと言う。

「そうよね!!」

同意の意を込めてわたしが勢い良く頷くと、中山サンが呆れた顔をした。

「一花、持って行って」

いつの間にか二つのカップに珈琲が注がれていた。トレイに載せて慎重に奥の席に運ぶ。

「お待たせしました」

ハンサムさんの前にそつと置くと、彼がふつとこつちを見上げた。

「ありがとう」

低い声に肌が粟立つような感覚になる。ああもう駄目、倒れそう。なんとか六ちゃんの分の珈琲も置いて、ふわふわの雲の上を歩いている気分になりながら戻った。

「ああ、やっぱりすつごく格好良かった！ 王子様みたい」

思わずカウンターの椅子に倒れ込むように座る。

「なあに？ 一花ちゃん、まさかの一目惚れ？」

小春ママがニヤリと笑った。

ああやっぱりそうか。あり得ないほどの心臓の鼓動も、声を聞いただけで鳥肌が立つような感覚も。これが本当の一目惚れと言うものなんだ。

「そうみたい……」

ぼんやりそう答えたら、いつもはポーカーフェイスな祥吾くんが、ギョツとしているのが目の端に見えた。

「やめときなさい。どこの誰かもわからないのに」

中山サンが、立ち上がりながら言った。さすが弁護士、正論だ。

「あら、だから一目惚れって言うのよ、センセ」

小春ママが妖艶まじげんに笑う。お会計をしていた中山サンの顔が一瞬赤くなったけど、すぐに肩をすくめて出ていった。

こっそりと奥のテーブル席を見ると、本物の王子様みたいにゆったりと椅子に腰掛けて珈琲コーヒーを飲んでる彼の姿が見えた。その姿を見るだけで顔が赤くなる。一目惚れか……
「グフフ……」

「一花、変な顔になってる」

祥吾さんの冷たい声に慌てて顔を戻す。椅子から降りて、カウンターの中に入ったそのとき、話を終えたらしい彼がスツと出ていくのが見えた。

ドアベルを鳴らし、カフェを去るその後姿をじつと見つめる。一分すつきの隙もない颯爽さつそうとした姿に、わたしの頬がまた赤く染まった。

「マスター、今のもつけどいて。あとおかわりね」

いつもの定位置に戻ってきた六ちゃんが言った。彼のことを聞きたくてうずうずしたけれど、隣で祥吾くんがじつと見ているので、おとなしくトレイを持ってテーブルを片付けに行く。

空になったカップやお水のグラスをトレイに載せ、テーブルをキレイに拭ふいた。彼がここにさっきまで座っていたんだ。そう思っただけで胸が高鳴った。

「随分ずいぶんな上客ね」

カウンターから小春ママの声が聞こえる。

「優秀だつて言わなかったかい」

六ちゃんには似合わない気障きざらつたらしい声。急いでカウンターに戻ると、六ちゃんがわたしを見てニヤリと笑った。

「一花ちゃん、残念だけど俺には守秘義務つてものがあるのさ」

「……まだ、なんにも言っていないけど」

「一花はなんでも顔に出るからな」

祥吾くんはさりとらうと、六ちゃんの前に新しい珈琲を置いた。

結局、六ちゃんには何も聞けなかった。けれど、再会の日はすぐにやってきた。なんと彼は、次の日も六ちゃんを訪ねてきたのだ。

「昨日はどうも」

六ちゃんに向けられた声はやっぱり超絶に素敵で、わたしの脳をクラクラさせた。

昨日と同じように六ちゃんと一番奥のテーブルで話している間、わたしの視線はまさに釘づけた。祥吾くんに咳払いせきほらいをされても、小春ママに冷やかされても、彼から視線を外すことが出来ない。

彼の優雅な立ち振る舞いは、やっぱりどこから見ても王子様以外の何者にも見えない。何かものすごい力に引つ張られるみたいに目が離せなかった。まるで地球から離れられない月のようだ。今までにこんな経験をしたことは一度もない。これが一目惚れだしたら、恋の力つてもものすごいんだって思ってしまう。そして、今までの恋愛経験なんて経験の内にも入らないんだと改めて感じた。

だから、翌日に彼がこなかったときは、みんなに呆れられるくらいがっかりした。名前も知らない彼の顔を見られないだけで、こんなに寂しい気持ちになるなんて……

それから数日開けて、また彼がきた。それはドアがチャイムと共に開いたとき、なぜか顔を上げる前にわかってしまった。だから今回は彼の顔を見た瞬間、

「こんにちは！」

と声を出して挨拶してみた。すると彼の目がわたしに止まり、軽く頭が下がった気がした。あのキレイな目がわたしを見て、少し微笑んでくれたような気さえする。

彼がわたしを見た！ そう思っただけでわたしの心は舞い上がり、いつまでも宙をふわふわと漂う。

「一花、見てもいいから、せめて仕事はしてくれ」

祥吾くんから諦めたような声で言われたけど、許可をもらったのでしっかり盗み見しつつ洗い物をする。

彼は今日も素敵だ。一分の隙もないクールな外見。目を離すことのできない顔立ち。見るたびにわたしの胸のドキドキは大きくなる。この歳になって、本物の王子様に恋をする日があるなんて……。大地に言ったら大笑いされそうだけど、このトキメキは止められないのだ。

「ああもう、なんだかわたしまで恥ずかしくなってきたわ」

飽きもせず奥のテーブルをこっそり見ているわたしの前で、小春ママが呆れ顔で言った。

「えっ？ なに？」

「もう思い切って告白したら？ というより、告白しなきゃいけない！」

言うなりわたしの顔をビシッと指さした。

「ええっ」

「命短し、恋せよ乙女。一花ちゃんは、そういう生き方を選んだのよね？」

確かにあの日、あの透き通るような青空を見ながら、*“今”*を全力で生きると決めた。後悔しない生き方をする、と。決めたけど、それと恋愛は違うような……

「同じよ」

小春ママがズバリと言う。

あら、わたし声に出してたかしら？

「いい？ 恋愛にはタイミングつてもものがあるのよ。それを逃したら、チャンスは二度と訪れないの。それに女は度胸と愛嬌よ。一花ちゃんは元々愛嬌はあるんだから、あとは度胸だけよ。当たって砕けてきなさい」

「……振られること前提なんだ」

隣で珈琲を淹れていた祥吾くんがぼつりと言った。

確かに、褒められているのか、けなされているのか微妙なところだ。でも告白するなんて考えてもみなかった。だって、見ているだけで満足なんだから。

「振られたらそれまで。次にいけばいいのよ、次にいけば。彼氏がほしいんでしょ。いい？ 一花ちゃん。女は恋をすればするだけ、キレイになるのよ」

わたしの目をじーっと見つめて小春ママが言った。相変わらず、すっぴんの彼女の肌は透けるようにキレイだ。

「小春ママもたくさん恋をしたの？」

「当然でしょ」

ばっちり二重の目で見つめられると、なんだか告白出来る気がしてきた。

「洗脳されてるな」

少し遠くで祥吾くんの呆れた声が聞こえる。すると、ずっと黙っていた中山サンがやけに冷静に言った。

「まあとりあえず練習でもしてみたら？」

「練習？」

「一花ちゃんは本番に弱そうだから」

「とりあえずこっちにきなさい」

小春ママにちよいちよいと呼ばれ、カウンターから出て彼らの前に立った。

「はい、どうぞ」

どうぞと言われても……。まあ練習なんだから何でもいいか。それに、告白を躊躇ちゆうちゆうして、もし後悔することになったら絶対に嫌だ。

「えーっと。じゃあ……はじめて見たときに、人生初の一目惚れをしちゃいました。す、好きです、つきあってくださいー！」

言うと同時に頭を下げる。どうなの？ こんなものなの？ 店内はなぜかシーンとしていて……そして誰かの息を呑む声が聞こえた。

ふと顔を上げると、なんとわたしの目の前に王子様が立っていたのだ。

えっ、ええっ!?

「それは本当か？」

低い声が耳をくすぐる。間近で見ると、まるで後光が差しているかのように神々こうたうしい。思わずふんふんと大きく頷いてしまった。

「よしわかった。ではつきあってやろう」

「……えーつつつ!!」

わたしと同じタイミングで叫んだのは小春ママだった。どうして一緒に驚くかな。

「ほ、本当ですか!? わ、わたしのことも知らないのに?」

ほんの数回お店にきただけ。ほんの数えるほど目が合っただけ。言葉を交わしたことなくってほとんどない。それなのに……。彼を見上げてそう言うと、彼はうつとりしてしまふほど優雅に微笑んだ。

「俺に二言はない」

ハッキリ聞こえた彼の声。それはもう疑いようがない。

「う、うそみたい。でも……それでも嬉しい!!」

喜びを隠せずみんなの方を振り返ったら、そこに居た全員が微妙な顔をしていた。

「……なんでそんな顔してるの？ 喜んでくれてもいいのに」

「いや、まあなんと言うか……」

小春ママも珍しく歯切れが悪い。勧めたのはママなのに、わたしの恋が成就したわりにはお祝い感がまったくないんだけど。とにかく改めて彼を振り返り、そのキレイな顔を見上げた。

「わたし、富樫一花、二十五歳です」

「西城暁人、二十七だ」

「じゃあ……暁人くんって呼んでいい？」

「……特別に許してやろう」

暁人くんがニヤリと笑った。その顔は、今まで思っていた王子様像とは少し違う気がする。一瞬アレ？ と思ったけれど、舞い上がっているわたしには些細なことに思えた。

「では今日はこれで。またな、一花」

そう言うと、サッと手を上げて暁人くんは店を出ていった。堂々としたその姿は、王子様というより王様っぽい気がする。

西城暁人。わたしの、たった今出来た恋人の名前だ。なんて素敵な名前なの！ 嬉しさがどんどん込み上げてきて、大声で叫び出してしまいたいそうさ。

頭の中をお花畑にしていたわたしは、他の人のことまで気が回らなかった。

「橘さん、ちよっと」

「お、俺のせいじゃないってっ」

祥吾くんが妙に冷静な顔で六ちゃんをカウンターの奥へ連れていったことも、アタフタする六ちゃんを小春ママと中山サンがちよっと哀れんだ目で見ていることも、全然知らなかった。

3

「おっはよーございます」

カフェの裏側にある従業員用のドアを勢いよく開けると、祥吾くんはすでに店内にいた。

「おはよう、一花」

「おはよう、祥吾くん」

小さなロッカーに荷物を入れ、エプロンをつけて朝の掃除に取り掛かった。祥吾くんはキッチン、わたしはホールの担当だ。

窓を全部開けて空気の入れ替えをして、モップで床の埃を集め、テーブルの上や椅子の座面も消毒をしながら拭いていく。一番奥のテーブルは、さらに気合を入れて磨いた。なにせ、つい最近わたしの恋人になった暁人くんの指定席なのだから。でもそこにはかならず六ちゃんもいるので、微妙といえば微妙だけれど。

「……グフフ。暁人くん、今日はくるかなあ」

おつきあいが始まってまだ一週間も経っていない。その間に暁人くんに会えたのはたったの二回。

そのどちらも六ちゃんを訪ねてきたついでにちょっとお話しするという感じで、イマイチ恋人らしい雰囲気にはなれていなかった。

せめてメールアドレスだけでも知っていれば……と思うけれど、聞くタイミングがつかめないし、相変わらず六ちゃんは守秘義務だつて言つて何も教えてくれない。

「今日もし会えたら、思い切つて聞いてみようつと」

店の中を眺めて椅子とテーブルを整え、それぞれに小さな花を飾つた。お花は祥吾くんが数日置きに買ってくる。お花を活けている花瓶もただの瓶じゃなくて、少しレトロなガラス瓶に、レースや端切れで装飾して、内装と合わせている。これは祥吾くんのお手製だ。水上の家の祥吾くんの部屋は、これでもかつていうほどシンプルなのに。どうしてこんなに違うんだろう。

「一花、終わつたらこつち手伝つて」

「はい」

そのうちに、開店時間になる。入口の鍵を開け、表側のドアノブに掛かっているプレートを「OPEN」にしたとき――

「おはよう、一花ちゃん」

呆れてしまうくらいだらしな性格の六ちゃんがそこにいた。いつもこんな風だけど、今は天使のように見えるから、恋愛の力つてたいしたもんだ。

「おはよう、六ちゃん。今日は暁人くんと会う？」

ズバリ聞けば、一瞬六ちゃんの目が泳ぐ。当たりだ。守秘義務で教えられないのはわかるけど、

不意をつけばちよい顔に出るのよね。

「やったー。今日は会えるーっ」

上機嫌で店の中に入ると、六ちゃんも後に続いた。

「俺は何も言つてないからな」

誰に向けて言つているのか、言い訳じみた六ちゃんの声が耳に入った。

お店がいつもより繁盛はんじょうしていたせいか、あつという間にランチの時間を過ぎて午後になっていた。「今日はまた一段とご機嫌ね、一花ちゃん」

ランチを食べ終え、のんびりと珈琲コーヒーを飲んでいた小春ママが、洗い物をしているわたしの顔を見て言った。

「例の彼と進展したの？」

「んー、今日こそメアドを聞こうとは思つてるよ」

「……まだ知らなかったの？」

小春ママは呆れ顔だ。隣に座っている中山サンも驚いた顔をしている。

「だって、タイミングがつかめなかったんだもん」

洗ったグラスを拭き拭き、少しいじけた目で二人を見てしまう。

「まあ、確かにここでしか会えないんだもんねえ」

頬杖をつきながら小春ママが言った。

そのとき、入り口の扉がチャイムの音と共に開いた。わたしの心臓が一気に跳ね上がり、顔を上

げたその先にはやっぱり暁人くんがいた。

「暁人くん！ いらっしやい」

暁人くんが片手を上げた。それと同時に突っ伏したままだった六ちゃんがむくりと起き上がって、奥の席に移動する。暁人くんもそれに続く。

奥の席でそこそと密談する二人の姿は、段々見慣れた光景になってきた。そしていつものように三十分程度で話を切り上げ、暁人くんが立ち上がってこっちにきた。

メアドをゲットするには今しかない。よし、いくぜ!!

チャンスとばかりにカウンターから飛び出し、暁人くんの前に立ちふさがる。

「暁人くん、メアド交換して！」

「悩んでいたわりにはストレートだなあ」

小さなつぶやきが中山サンから聞こえたけど、無視だ、無視。

「ああ、まだ教えていなかったか。悪かったな」

暁人くんはそう言うのと、スーツのポケットからスマートフォンを取り出した。

「赤外線でいいか？」

「うんっ。じゃあわたしが受信する」

暁人くんがスマホをささっと操作すると、あっという間にわたしのスマホに彼のアドレスが送られてきた。

「今晚、メールしていい？」

「ああ。いつでもいいぞ」

暁人くんはそう言うのと、颯爽とカフェを出ていった。後ろ姿を見送った後、わたしのスマホの電帳帳を見ると、サ行の一番最初に「西城暁人」の名前とアドレスがあった。

「グフフフフ……」

込み上げてくる笑いが止まらない。

「一花、気持ち悪いからやめなさい」

祥吾くんの冷静な声も、今のわたしには効果がない。嬉しさで心が跳ねるように踊っているのが自分でも良くわかる。たったひとつのメアドレス。でも、わたしには特別なアドレスだ。

「メアドひとつでこれだけ喜べるなんて、一花ちゃんって本当に純真なのねえ」

「小春さんにもこんなときがあったでしょ。相当昔に。……ギャッ！」

六ちゃんが叫び声を上げて足を押さえているのを横目に見ながら、わたしはスマホをぎゅっと握り締めた。

仕事を終えて自分の家に帰ったときには、すでに夜の九時を回っていた。

部屋に入るとすぐにお風呂に直行する。まだ五月とはいえ、朝から晩まで働くと結構汗をかくので、シャワーを浴びたくて仕方がない。

ワンドームのこの部屋には少し狭いユニットバスしかない。服を脱いで、熱いシャワーを頭から浴びながらついでに化粧を落とす。全身を洗って、ようやくスッキリしてお風呂場を出た。バスタ

オルでさきつと拭いて、部屋着に着替える。

それから鞆の中からスマホを取り出し、部屋の真ん中に置いてある小さなテーブルの上に置いて、ついでにコンビニの袋からシュークリームを出して、袋を開けて一口かじる。

「うまし。風呂上がりのシュークリームは最高だわ」

鼻歌を歌いながら、スマホのメールの新規画面を表示した。恋人への一番最初のメール。なんて書こうか、メアドをもらった瞬間からずっと考えていた。

過去の恋愛を思い返してみたけど、一番最初にどんな内容を書いたか思い出せない。きつと他愛ないことなんだろう。

告白をしたくせに、わたしは暁人くんのことを何も知らない。なぜか告白を受け入れてくれた暁人くんもきつと、わたしのことを何も知らない。でも、知らないなら、知ってもらえばいいんだ。

「がんばりは。一花です。今日はメアドを教えてくださいありがとうございます。ちよつとドキドキだけど、早速メールしてみました。わたしは朝から八時過ぎまでびつちりと働き、今さつきようやく家に帰ってきたところです。そうそう、暁人くんはお店では珈琲しか飲んでないけど、うちはランチもパンケーキもすぐく美味いので、今度ぜひ食べてね。暁人くんは今日はどんな一日を過ごしましたか？ それともまだお仕事中心？ からだに気をつけて頑張ってください」

こんな感じ？ なんか業務連絡みただけ……。まあいいか、と暁人くんのアドレスを入れて送信ボタンを押した。

テレビのお笑い番組を見ながらドライヤーで髪を乾かしていたら、テーブルの上に置いてあった

スマホが震えた。急いでドライヤーを止め確認すると、そこには「西城暁人」の文字。

「やったー！」

「まだ仕事中心だがもうすぐ終わる。今日も忙しかった。 暁人」

「……これだけ？」

いや、でもまだ仕事中心だもん、当然と言えば当然。返事をもらえただけでも良しとしよう。

「お返事ありがとう。お仕事、あともうちよつと頑張つてね。 一花」

それだけ打って送信した。

そうだ。記念すべき暁人くんからの最初のメールだから、消えないように保存しとこ。いや、その前に暁人くん専用フォルダを作らないと。わたしは暁人くん用の受信フォルダを作り、最初のメールをそこに保存した。それからもう一度、読み返す。

少し……いや、かなり素っ気ないけど、それでも忙しい中、送ってくれたメールだ。嬉しくてたまらない。本当に恋愛つてすごい。ほんの些細なことでもこんなに幸せな気持ちになるなんて。

もうそろそろ仕事は終わったのかしら？ そもそも、暁人くんの仕事って何だろう。

わたしは都心のだ真ん中のカフェで何年も仕事をしているから、お客さんとして、色々な人を見ている。だから、暁人くんが普通のサラリーマンとは少し違うんだろうとは、はじめて見たときから思っていた。

次に会ったら聞いてみよう。

グフフ……。ウキウキして、楽しくて仕方がない。幸せな気分のまま歯磨きをして、そして幸せ

な気分のまま眠りについた。

翌朝目が覚めたときも、その気分はまったく失われていなかった。鼻歌を歌いながら支度をして、いつもの電車に乗ってカフェに向かう。

「ご機嫌だね、一花」

呆れ顔の祥吾くんもなんのその。気分よく掃除をして開店時間を迎えた。いつもの時間に六ちゃんと小春ママが現れたから、満面の笑みでお迎えしたのに、思いつき呆れた顔をされてしまう。

「一花ちゃんの頭の中は満開ね」

何がとは言わず、小春ママはあっさりわたしの状況を表現した。

「ふふーん。昨日ね、暁人くんからメールがきたの」

「へえ。見せてよ」

仕事中だし……と思いつながら祥吾くんの顔をちらりと見ると、呆れながらも頷いてくれたので、エプロンのポケットに入れてあるスマホを取り出した。メールの受信ボックスから、暁人くん専用フォルダを選ぶ。それを見るだけで、嬉しさが込み上げてくる。

「グフフフ」

「一花、その顔は気持ち悪いからやめなさい」

祥吾くんの冷たい声を聞き流し、暁人くんからのメールを小春ママに見せた。

「……これだけ？」

「うん」

「ちよつと、一花ちゃん、どんなメールを送ったの？」

と、小春ママがわたしのスマホを奪った。

「ちよつとお、勝手に見ないで下さいよ」

「なにやってるの？」

取り返そうと身を乗り出したとき、中山サンがやってきてわたしのスマホを覗き込んだ。

「もうっ。みんなで見ないですよ」

手を伸ばしても届かない。しばらくしてようやく返してくれたけど、二人の顔はまさに呆れ顔だった。

「もし別れるとき、慰謝料を請求するなら手伝ってあげるよ」

「縁起でもないこと言わないで」

さらりと言った中山サンの言葉に反論しつつ、わたしは戻ってきたスマホを胸にギュッと抱きしめる。

「いまどき中学生だつてもうちよつと色っぽいメールを送るわよ。一花ちゃんの恋愛経験値が異様に低すぎるのか、相手が相当手強いのか……。まあ両方かもね」

恋愛経験値が低いのは自分でもわかっているから、小春ママに返す言葉もない。言いよんでいるわたしに、小春ママはものすごく妖しい目を向けた。

「わたしが培ってきた恋愛の手練手管のすべてを、一花ちゃんに伝授してあげてもいいわよ」

「ほ、本当に!?」

「やめときなさい!」

わたしの声と、三人の男性の声が重なった。祥吾くと六ちゃんと中山サンが呆れ顔でわたしを見ている。

「小春さん、一花がもっと変になったら困るからそれだけはやめという」

祥吾くんがそう言うと、小春ママが肩をすくめた。なんだかんだ言って、かなり個性的なこの常連客も祥吾くんには逆らわない。小春ママはそのまま中山サンと世間話を始めてしまった。

あーあ、興味あつたのになあ。小春ママの恋愛手練手管^{てれんてくた}。

さて、と気合いを入れなおし真面目に仕事をしようと思つたそのとき、店の扉が開いた。入つてきたのは暁人くんだった。

「暁人くん!! いらっしやいっ」

思わずカウンターから飛び出す。後ろから、祥吾くんの冷たい視線を感じた気がしたけど、自分でも止められないのだから仕方がない。

「昨日はメールありがとう」

奥の席に案内しながら言うと、暁人くんが「ああ」とつぶやいた。席に座つた暁人くんの隣に立つたわたしは、さつき小春ママから言われたことを思い出してたずねた。

「ねえ、暁人くん。もっと色気のあるメールを送つた方がいい?」

暁人くんがやけにゆつくりとした動きでわたしを見上げた。何を考えているのか、まったくわか

らない顔だ。

「……色気のあるメールとは、どんなメールだ?」

「さあ、わかんない」

思わず肩をすくめて見せると、暁人くんが少し首を傾げて何かを考えている。

「……いや、今のままでいい。なかなか興味深いから」

そう言うと、暁人くんは一人頷いた。

「ありがとう!」

ほら、別に間違つてなかったじゃない。

「じゃあ、これからも毎日メールしていい?」

暁人くんに向き直つて聞いてみると、すぐに頷いてくれた。

「ああ、いつでも送ってくれ。可能な限り返事をしよう」

「ありがとう! 絶対にメールするね」

思わず踊り出しそうな気分になりつつ、カウンターに戻つた。祥吾くん達は変な顔をしていたけれど、気にしていられない。今のわたしは最高に幸せなのだ。

この幸せをみんなに分けてあげたいけれど、なぜか誰もわたしと目を合わせてくれなかった。

約束通り、暁人くんとのメールのやりとりは毎日続いた。初日からほぼ変わらないわたしの業務連絡みたいなメールに、暁人くんからは一言メッセージが返ってくる。内容は「疲れた」と「忙しい」が半々くらい。それでも返事をくれる暁人くんに感動していたけれど、小春ママにはもつと色気を出せと毎日言われている。

「だいたいメールにどうやって色気を入れるのかわからない。思い切ってハートの絵文字を入れてみたけど、暁人くんから、

“この下駄のようなマークはなんだ？”

と返事がきてしまった。どうやら機種が違うせいでうまく表示されなかったらしい。

なのでそれ以来、絵文字は使っていない。暁人くんだってこれでいいと言っているのだし、わたしも今のままで十分に幸せなのだ。

そんなことを続けていたある日、はじめて暁人くんのほうからメールがきた。時間は朝の十時を少し過ぎたところで、店内にはまだ六ちゃんしかいない。

「暁人くんからだ!!」

思わず叫ぶと、カウンターに突っ伏して寝ていた六ちゃんが顔を上げた。

「祥吾くん、ごめんっ」

一応仕事申中だから、祥吾くんに一声かけてからメールを開く。

“珈琲が飲みたい。今から会社に届けてくれ”

思わず声を出して読んでしまった。いつものようにちよつと素っ気ない言葉。その後に、会社の住所と会社名が書かれている。それは、ここから歩いて十分ほどの所にある大きなビルだ。

西城グループ本社ビル。西城グループと言えば誰もが知っている大きな企業だ。西城……西城!?

「な、なんと！ 暁人くんってもしかして社長さんなの!？」

思わずのけ反ったわたしを、祥吾くんが冷めた目で見る。

「一花はもつといろいろ勉強した方がいいよ。今作るから持っていきなさい」

「え？ 今までデリバリーなんてしたことなかったじゃない？」

もう何年もこの店で働いているけれど、そんなこと一度もやったことはない。

「頼まれたことがなかっただけで、やってないとは言っていないよ。宣伝もしていないけど」

そうさりと云った祥吾くんが、棚の奥の方から紙製のカップと蓋を取り出した。よくファストフードで見るアレだ。

「そんなのまであったの!？」

「だから、やってないとは言っていないって」

さっさと準備を進める祥吾くんはそれ以上何も言わなかった。とりあえずわたしは出かける準備をすることにした。

おっと、その前に返信しなきゃ。

「暁人くん、こんにちは。珈琲コーヒーの件、了解です。今作っているので、二十分以内には届けます」斜めがけに出来る小さな鞆にお財布とスマホを入れて裏の休憩室から戻ると、茶色いシンプルな紙袋がカウンターに置かれていた。

「一応転倒防止の緩衝材かんしょうざいを入れてあるけど、こぼさないように気をつけて持っていくんだよ」すでに袋口が折り曲げてあるから中は見えないけれど、持ち上げて底を支えると結構熱い。

「じゃあいつてきます」

「気をつけるよー」

カウンターから手を振ったのは六ちゃんだ。まったたく、どいつもこいつも、わたしを子ども扱いして。はじめてのお使いじゃないんだから……いや、カフェとしてははじめてか。

店を出ると、青空が広がっていた。スマホでマップを見ながらビルの間をてくてくと歩く。

暑くなってきたので、街路樹の影を選んで歩くこと数分。目的のビルが見えてきた。オフィスビルというより、大きな商業施設のような。正面玄関前には車の入れるロータリーがあり、たくさんビジネスマンが出入りしている。

そっか、実際に見るまで実感がなかったけど、暁人くんはこんなに大きな会社の社長さんだったんだ。あの王子様というか王様のような雰囲気もこれなら納得がいく。

忙しそうなお客の間を、カジュアルな服にカフェのエプロン姿で歩いている自分は、まさに場違いとしか言いようがない。でも、これもわたしの仕事だ。

よしと勢い込んで正面玄関から入った。高い吹き抜けとガラス張りのホールは想像以上に広くて、まるで外国の高級ホテル（といってもいったことはないけど）のロビーみたいだった。

目の前には総合受付と書かれたカウンターがあつて、いかにも受付嬢って感じの若いキレイな女性が二人座っている。

「あの、『フランシユ』の富樫です。西城暁人さんから頼まれて珈琲を届けにきました」

そう告げたわたしに、受付の女の子がにこりと笑った。

「うかがっております。恐れ入りますが、この先にある一番奥のエレベーターホールにお進み下さい。そこにまた案内の者がおりますので」

彼女はそう言いながら手で方向を示した。長い通路の奥に確かにエレベーターが見える。

「ありがとうございます」

お礼を言つて、奥に向かう。真っ白な壁とグレーの絨毯じゅうたん。途中に扉はほとんどなく、誰も歩いていない。若干不安に駆られながら、最奥のエレベーターホールへたどり着いた。するとそこにまた小ぶりの受付カウンターがあり、今度は若い男の人が座っていた。

「富樫様ですね。西城は最上階におります」

わたしの顔を見るなり立ち上がると、エレベーターのボタンを押して扉を開けてくれた。

「あ、ありがとうございます」

丁寧にお辞儀をしてくれたので、こちらも慌てて頭を下げた。乗り込んだエレベーターはこれまでも見た中で一番豪華だ。言われた通り最上階のボタンを押すと、ゆっくりと動き出した。

晁人くんって、本当にすごい会社の社長さんなんだ。知らなかったとはいえ、なんだか違う意味でドキドキしてきた。エレベーターの階を表す数字はどンドン上がっている。あーどうしよう。緊張なんて滅多にしないのに。

まだ熱い紙袋をぎゅっと抱え込むと同時に、エレベーターがスッと止まった。音もなく扉が開き、目の前には奥までまっすぐに伸びる廊下が見える。恐る恐る足を出すと、出たところにまた別の男性が居た。驚きのあまり思わず飛び上がりそうになる。

「お待ちしておりました。このまま一番奥の扉までお進み下さい」

また丁寧にお辞儀をされ、こっちもペコペコしながら廊下を進んだ。廊下の一番奥に扉があつて、その前にまた人が立っているのが見える。つて、一応見えるのだけど、実のところ遠すぎてよくわからない。廊下の片側はすべて窓。まわりのビル群が一望出来て、この建物がどれだけ高いのかがよくわかる。

反対側の白い壁には所々に絵画が飾られていて、まるで美術館のよう。そしてここもまた他の扉が見当たらない。本当にこの先に晁人くんが居るのか不安になってくる。

ようやく奥の扉がはつきりと見える場所まで来た。まるで映画に出てくるみたいな、真つ黒なサングラスと真つ黒のスーツを着た屈強な男の人が扉の前に居る。わかりやすいくらいにわかりやすい。これがSPというヤツね。

ようやくたどり着いたわたしにその人はスツとお辞儀をして、無言のまま扉を開けてくれた。

「ありがとうございます」

ここにきてからずっとペコペコしているから、そろそろ首が疲れてきた。

扉をくぐると、そこには応接間のような広い空間があつた。十名くらい人が居て、半分はさつきの人と同じ黒ずくめのSPで、部屋の隅や壁沿いに立っている。残りの人達は普通のスーツ姿。社員の人らしく、ソファに座っていた。

SPの人達が一齐にこつちを向いたので、思わず後ずさってしまう。部屋の中は、わたしでもわかるくらいピリピリとした緊張感が漂たはっていた。

どうしたものかと考えていると、部屋のさらに奥の扉が開いた。そこから少し慌てた様子で数人の男の人が飛び出してくる。

「十分以内にすべて持ってこい」

奥の部屋から聞こえてくるのは晁人くんの声だ。居てくれて良かったと思いつつ、その声のあまりの鋭さに驚く。

「次！」

また鋭い声が飛んだ。部屋に居た別の社員達が泣きそうになりながら、奥の部屋に入っていく。突っ立ったまままでいるのもどうかと思ったので、すぐ横に居た黒ずくめの男性を見上げて声を掛けた。

「あー……」

「すみません、もう少しお待ちください」

かなりの高さから見下ろしてきた彼に、低い声でそう言われた。

「あー、はい」

扉の向こうからは暁人くんのビシビシした声がかすかに聞こえてくる。……なんか、怖い。王子様って言うより、本当に王様か絶対君主みたいだ。でも、こんなに大きな会社の社長さんならこんなものなの？ そう思っていたらまた扉が開いた。そして、さつき人っていた男の人達が、ふらふらと出てきた。十歳くらい歳をとったかのように、明らかに疲弊ひんぱんしている。

わー、まるで妖怪製造部屋だ。

「お待たせしました。どうぞ」

真横で聞こえた低い声に、思わずびくりとする。次はわたしの番なの!? ただ珈琲コーヒーを届けにきただけなのに、こんなに緊張するなんて……

促うながされて、部屋中の人間にジロジロ見られながら扉をノックした。

「入れ」

暁人くんの声だ。扉をそっと開けると、まず真正面の大きな窓の向こうに空が見えた。その手前には大きな机があつて、暁人くんが座つて書類を読んでいる。ここにも少し小ぶりのソファセットが置いてあるけれど、ここはさつきの部屋よりもずっと狭い。

S Pの人が一人と、スーツ姿の男性が数人、机のまわりに立っていて、その全員がわたしを見ていた。

「こ、こんにちはー」

声を出すと、暁人くんが顔を上げた。

「ああ、一花か。ご苦労だったな」

暁人くんが書類を置いて手招きした。机を回り込んでそばまでいき、持ってきた紙袋を渡す。

「はい、珈琲」

「ありがとう」

そう言つて紙袋を受け取つた暁人くんは、中をのぞいて珈琲のカップを取り出し、机の上に置いた。大きな机の上にはたくさんの書類があつて、企画書やら計画書やらの文字が見える。

「暁人くんって、社長さんだったの？ 全然知らなかったよ」

カップの蓋を開けて珈琲を飲んでいる暁人くんにそう言つたとき、すぐそばで咳払いせきほらが聞こえた。目をやると、一人の若い男の人が苦虫を噛み潰したような顔でわたしを見ていた。

「失礼な。暁人様は総帥そうすいです」

その言葉の後に鼻を鳴らす音が続かないのが不思議なくらい、嫌味いやみっぽい言い方だった。わー、この人、びつくりするくらい意地悪そう。でも、今なんて言つた？

「ぞ、雑炊ぞうすい？」

「総帥そうすいです」

「ああ、じゃああれだ、ソー……スウィー……」

「そ・う・す・い!! 総帥そうすいです!」

わー。マジ切れした。

「なんなんですかっ、このおかしな女は!?!」

その人はプリプリと怒って暁人くんを見た。暁人くんは聞いていないのか、珈琲を飲みながら紙袋の中をじっと見ている。

「暁人くんの恋人です」

代わりにそう言うと、その男がものすごく驚いた顔をした。えー、なにこの反応。

「じよ、冗談もいい加減にしなさい!」

若い男はさらに怒りを増したらしい。

「冗談じゃないもん。だよね!? 暁人くん!」

後ろに回り込み、暁人くんの肩に手を置いて覗き込むと、暁人くんがわたしを見てニヤリと笑った。

「まあ、しいて言えばな」

「しいて言わなくても恋人です!!」

もう、暁人くんまでっ。

見知らぬ男ならともかく、暁人くんにまで言われるのはちよつとむかつく。つきあってくれてるって言ったのに!!

わたしがプリプリと怒りながら帰ろうとしたら、背後で暁人くんの笑い声が聞こえた。

「また頼むぞ。一花」

笑い混じりの声に振り返り、手だけを振って部屋を出ると、今度は黒ずくめの男の人達がじっとわたしを見ていた。さつきまであった緊張感は消えているようだ。

「お邪魔様でした」

それだけ言って、入口に立っていたSPの人にも挨拶をして、競歩みたいな速さでエレベーターまで歩いた。次は絶対に走ってやる。

その後いろいろな人にベコベコ頭をさげながら、わたしは暁人くんの会社を出た。むかつくのはあの部屋に居たあの若い男だけで、他の人はみんな親切だった。

それにしても、この会社に居るときの暁人くんは、まるで過剰包装されたプレゼントのようだ。本人にたどり着くのがこんなに大変なんて。総帥か……。どういう意味だったっけ? 社長よりも偉いってことだろうけど。帰ったら祥吾くんに聞いてみよう。

ぶらぶらと歩いてカフェに戻り、ドアを開けたらカウンターに座っていたいつものメンバーが一齐にわたしを見た。

「ただいまー」

とりあえず好奇心いっぱいな視線は無視だ、無視。奥のロッカーに鞆を仕舞う。と、そこで、珈琲代をもらってこなかったことに気がついた。

「あー、ごめんっ祥吾くん。お金もらうの忘れちゃった!」

ランチの用意を一人でしていた祥吾くんの手伝いを始めながら言う。

「ああ、橘さんのツケにしとくからいいよ」

目の前にいた六ちゃんがむせた。これまで暁人くんと打ち合わせ代は全部六ちゃんのツケだけど、今回もそれでいいのかしら?